

変額個人年金保険「アクサの原資保証の投資型年金」 2021年度 特別勘定決算のお知らせ

1. 運用環境 (2021年4月～2022年3月)

【日本株式市場】

日本株式市場は下落しました。年度末の東証株価指数 (TOPIX) は前年度末比-0.39% の1,946.40ポイント (前年度末1,954.00ポイント) となりました。企業業績は良好でしたが、米国の利上げに対する懸念や、新型コロナウイルスの感染拡大による政府の緊急事態宣言の発出等により上値も重く、日本株式市場は8月まで横這いの推移でした。その後、新型コロナ新規感染者数のピークアウトや、新政権の経済政策に対する期待等により2021年9月末にかけて株価は上昇しました。12月末にかけては、金融所得課税や自社株買い規制に対する懸念、オミクロン株の拡大等により日本株式市場は下落しました。2022年1月に入ると、米国の大幅な利上げやロシアのウクライナ侵攻等に対する懸念により続落しました。年度末にかけてロシア・ウクライナ間の停戦合意に対する期待等から反発しましたが、年度を通じてはマイナスのリターンとなりました。

【外国株式市場】

米国株式市場は上昇しました。年度末の NY ダウ工業株30種は前年度末比+5.14% の34,678.35ドル (前年度末32,981.55ドル) となりました。インフレ懸念による利上げ観測や変異株を通じた新型コロナウイルスの感染拡大により下落する局面もありましたが、ワクチン接種の加速による経済の正常化期待や景況の改善、良好な企業業績等により、米国株式市場は2021年4月～12月の期間は上昇基調となりました。しかし、2022年に入ると、インフレが顕在化したために FRB (連邦準備制度理事会) の利上げが従来の市場の想定よりも大幅になるとの観測が高まったことやロシアのウクライナ侵攻等により、米国株式市場は下落しました。3月末にかけてロシア・ウクライナ間の停戦合意に対する期待から反発し、2021年度を通じてはプラスのリターンとなりました。欧州株式市場も同様に、インフレによる金利の上昇懸念や変異株による新型コロナウイルスの感染拡大により下落した局面はあったものの、ワクチン接種の加速による経済の正常化に対する期待や、堅調な企業業績等を背景に2021年4月～12月の期間は上昇基調となりました。しかし、2022年に入ると、インフレ懸念による金利上昇やロシアのウクライナ侵攻等により下落しました。年度末にかけては停戦に対する期待等から反発しました。市場別の年間騰落率は、独 DAX 指数-3.96%、仏 CAC40 指数+9.77% となりました。

【日本債券市場】

日本債券市場は、10年国債の金利が上昇 (価格は下落) し、年度末には0.220% (前年度末0.095%) となりました。米国金利の上昇の影響を受けて、金利が上昇する局面があったものの、国内景況の回復が緩やかであることや物価が安定していたこと等から、2021年4月～12月の期間においては、日本債券の金利は低位安定で推移しました。その後、2022年に入ると米国が大幅に利上げを行うとの観測等により、日本債券の金利は上昇しました。ロシアのウクライナ侵攻等により、金利が低下 (価格は上昇) する局面もありましたが、3月末にかけて一段上昇し、日銀が指値オペを実施して、目標の範囲 (10年金利の上限が0.25%) に金利上昇を抑制する展開となりました。

【外国債券市場】

米国債券市場は、10年国債の金利が上昇 (価格は下落) し、年度末には2.338% (前年度末1.740%) となりました。変異株を通じた新型コロナウイルス感染者数の拡大等により金利が低下 (価格は上昇) する局面もありましたが、インフレ抑制の為に FRB が利上げを行うとの観測等を受け、2021年4月～12月の期間において米国債の金利は上昇基調を辿りました。その後、2022年に入ると、ロシアのウクライナ侵攻等により金利が低下する局面もありましたが、FRB が市場の従来の想定よりも大幅な利上げを行うとの見方等から、3月末にかけて金利は一段上昇しました。FRB は3月に0.25% の利上げを実施しました。

欧州債券市場は、独10年国債の金利が上昇し、年度末には0.548% (前年度末-0.292%) となりました。変異株によるコロナウイルスの新規感染者拡大により金利が低下する局面は米国同様にもありましたが、欧州においてもインフレ懸念が高まったことや米国の金利上昇の影響を受けて、2021年4月～12月の期間において欧州債券の金利は上昇基調を辿りました。2022年に入ると、ロシアのウクライナ侵攻により金利が低下する局面もありましたが、欧州においても引き続きインフレ懸念があることや米国の金利上昇の影響等により、3月末に向けて金利は一段上昇しました。

【外国為替市場】

米ドル / 円相場は、米ドル高円安となり、年度末には122.39円 (前年度末110.71円) となりました。4月に米国長期金利の下振れにより米ドル安円高となり、一時107円台をつける局面もありましたが、その後は利上げ観測を背景に米国長期金利が上昇する一方で、日銀が従来の金融政策を維持したことから、日米金利差が拡大し、米ドル / 円相場は年度を通じて米ドル高円安基調となりました。

ユーロ / 円相場は、ユーロ高円安となり、年度末には136.70円 (前年度末129.80円) となりました。2021年4月～12月にかけては、欧州債券の金利が上昇する局面では、ユーロ高円安となったものの、ユーロ / 円相場は1ユーロ = 128円～134円のボックス圏の推移となりました。2022年2月にロシアのウクライナ侵攻が始まり、ヨーロッパ経済への悪影響が大きいとの懸念から大幅にユーロ安円高となりました。その後、ロシア・ウクライナ間の停戦合意に対する期待が高まったことや、欧州債券の金利が上昇し欧日の金利差が拡大したことから、3月末にかけて大幅にユーロ高円安となりました。

2. 特別勘定資産の内訳 (2021年度末)

(単位：百万円、%)

区 分	アロケーション α (2010)	
	金 額	構成比
現 預 金 ・ そ の 他	17	13.1
株 式	-	-
公 社 債	-	-
外 国 株 式	-	-
外 国 公 社 債	-	-
そ の 他 の 証 券	114	86.9
貸 付 金	-	-
合 計	131	100.0

(注) 金額は百万円未満を切り捨て。
構成比は小数点第2位を四捨五入。

3. 特別勘定の運用収支状況 (2021年度末)

(単位：百万円)

区 分	アロケーション α (2010)
	金 額
利息配当金等収入	-
有価証券売却益	12
有価証券償還益	-
有価証券評価益	-
為替差益	-
その他の収益	-
有価証券売却損	0
有価証券償還損	-
有価証券評価損	0
為替差損	-
その他の費用	-
収 支 差 額	11

(注) 金額は百万円未満を切り捨て。

4. 保有契約高 (2021年度末)

(単位：件、百万円)

項 目	件 数	金 額
変額個人年金保険 (08)	19	122
合 計	19	122

(注) 金額は百万円未満を切り捨て。

5. 特別勘定の運用状況

《アロケーション α (2010)》

運用実績 (2022年3月末日現在)	騰落率 (%) (注1)	1年	3年	5年	設定来
			Δ 2.74	Δ 1.02	Δ 1.43
運用方針	<p>主に国内外の国債および主要取引所に上場する債券先物、株価指数先物などを含む金融派生商品（デリバティブ）、ならびにわが国の政府保証付債券（短期国債など）へ分散投資を行い、信託財産の長期的な成長を目指します。主な対象資産の価格変動性に応じて、実質的な資産配分を機動的に見直し、リスク・コントロールを図ります。</p> <p>実質的な株式への資産配分は、原則として投資対象の純資産総額の10%~30%とし、その内訳は原則として日本株式50%、米国株式25%、欧州株式25%とします。</p> <p>実質的な債券への資産配分は、原則として投資対象の純資産総額の70%~90%とし、その内訳は原則として日本債券40%~90%、米国債券および欧州債券10%~60%とします。原則として、実質的な債券への配分の15%相当を上限として、米ドルおよびユーロの通貨ポジションを保有します。</p>				
運用経過および今後の運用方針	<p>資金の流出入に合わせて、「適格機関投資家私募 アライアンス・バーンスタイン・グローバル・アロケーション (30/70)」への投資を行いました。当該ファンドへの投資比率は概ね高位を維持しました。</p> <p>上記運用方針を継続し、「適格機関投資家私募 アライアンス・バーンスタイン・グローバル・アロケーション (30/70)」への高位の投資比率を維持します。</p>				

(注1) 騰落率は、当月末における、上記各期間のユニットプライスの変動率を表しています。

お問合せ窓口：カスタマーサービスセンター 0120-933-399

受付時間 月~金 9:00~18:00

土 9:00~17:00 (日・祝日、12/31~1/3を除く)